



図書館展示11/12月●2003  
国立音楽大学音楽学部音楽学学科第19回研究発表会資料展

# ヴィオラ・ダ・ガンバ

ヴァイオリン属との対立と歩み寄り



期間●11月10日～12月20日  
場所●図書館ブラウジングルーム

国立音楽大学音楽学部音楽学学科第19回研究発表会  
2003年11月18日（火） 国立音楽大学講堂小ホール



## ヴィオラ・ダ・ガンバとは・・・

---

ヴィオラ・ダ・ガンバは16世紀から18世紀にかけてヨーロッパで広く演奏された楽器です。両足ではさんで弾くことから「ヴィオラ・ダ・ガンバ(脚のヴィオラ)」と呼ばれます。

ヴァイオリン属楽器(ヴァイオリン、チェロなど)と異なり6～7本の弦があり、ギターのようにフレットを有し、弓はアンダーハンドで持ちます。また、胴はヴァイオリンと比べて厚く、なで肩で、裏板が平らになっています。ヴァイオリン属にヴァイオリン、ヴィオラ、チェロと異なる大きさがあるのと同様に、トレブル、アルト、テノール、バスなど音域によって様々なサイズがあります。

## ヴィオラ・ダ・ガンバの音楽と音楽家

---

この楽器のために書かれた作品には、ルネサンスの声楽を模倣したものや、「ファンタジア」「バヴァーヌ」といった合奏曲、通奏低音を伴う独奏曲があります。

イギリスにおける黄金期(17世紀中期)には、J・ジェンキンス、C・シンプソン、H・パーセルなどの音楽家が活躍しました。フランスではサント・コロンプ、M・マレ、ドイツではJ・シェンクやK・アーベルが挙げられます。ヴィオラ・ダ・ガンバは、彼らが活躍した当時の貴族社会の中での花形楽器でした。



## ヴィオラ・ダ・ガンバの衰退と復興

---

ヴィオラ・ダ・ガンバは、西洋音楽の中で様々なレパートリーを形成し、他の楽器とのアンサンブルの中でも旋律楽器として、あるいは通奏低音楽器として活躍してきました。しかし、18世紀に入り社会制度に変化が起こると、芸術音楽、社交音楽としてのヴィオラ・ダ・ガンバ音楽を支えてきた上流階級の人々が権力を失い、彼らの文化の衰退に伴って、ヴィオラ・ダ・ガンバは活躍の場を失っていきます。さらに、新しく文化の担い手となった市民階級の人々がコンサートホールでのきらびやかな響きを求め、イタリア音楽がもてはやされるようになりました。ヴァイオリン属はこうした変化に対応して急速に発展していきました。そのような状況の中で、アントニオ・フォルクレのように、ガンバでヴァイオリンのテクニックを試した作曲家や、ル・ブランのように演奏テクニックの改善を促した演奏家が現れましたが、結局、出せる音量の限界や演奏の難しさが災いして、ヴィオラ・ダ・ガンバは廃絶してしまいます。

しかし、20世紀に入るとヴィオラ・ダ・ガンバは復興されます。現在、アメリカやイギリス、フランスでは、作曲家や演奏家、愛好家をメンバーとするヴィオラ・ダ・ガンバ協会が設立され、活動しています。日本でも1973年に協会が設立され、公開レッスンやレクチャー、コンサートなどの主催、後援をしています。また、個人演奏家によるリサイタルも多く催されています。

20世紀にヴィオラ・ダ・ガンバが復興された背景には、「昔の音楽は、その当時使われていた楽器で演奏して初めて生き生きとよみがえる」という考えが生まれたことがあります。実際、演奏は指定された楽器で行うことにより、その作品が生まれた当時の演奏に近づけることが出来ます。それは、その音楽を正しく理解することに繋がるでしょう。また、私達がそのような音楽にきらびやかさを求めずにいられるのは、現在あらゆる音楽を聴くことが出来る環境にあるからだと思われます。ヴィオラ・ダ・ガンバに限らず、様々な古楽器が演奏されるようになると、「近代楽器のきらびやかな響きとは異なり、古楽器演奏そのものが持つ繊細で素朴な音色がとても味わい深い」という意見も出るようになりました。

現在、ヴィオラ・ダ・ガンバは、古楽の演奏に貢献するだけでなく、近代の楽器にはない、そのガンバ独自の音色を活かした現代音楽のレパートリーも増やしています。



展示資料

\*\*\*\*\*  
図版パネル

**シン普森著「The division-violist」(1659)より**

Christopher Simpson. *The division-violist: or an introduction to the Playing upon a ground*  
(Performers Facsimiles New York, 1659) <請求記号 H37 - 602 >

**トレブル・ガンバ(ほぼ原寸大)**

皆川弘至編『ヴァイオリン百科』(学習研究社、1982) <請求記号 X - 075 / B >

**ヴァイオリン(ほぼ原寸大)**

小塩樹三郎編『ANTONIO STRADIVARI IN JAPAN』(学習研究社、1984) <請求記号  
C53 - 997 >

**ヴィオラ・ダ・ガンバ(左からトレブル・ガンバ、テノール・ガンバ、バス・ガンバ)**

Nathalie Dormetsch. *VIOLA DA GANBA* (New York Hirichsen Edition, 1962)  
<請求記号 C6 - 074 >

**ヴァイオリン属(左からヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)**

皆川弘至編『ヴァイオリン百科』(学習研究社、1982) <請求記号 X - 075 / B >

**ヴィオラ・ダ・ガンバの大編成合奏の図(1630年頃)**

**ヴィオラ・ダ・ガンバの合奏の様子(現代)**

David Munrow. *Instrument s of the Middle Ages and Renaissance* (Oxford University  
Music Department, 1976) <請求記号 X - 051 / M >

Sylvestro Ganassi. *Regola Rubertina* (1542・43) タイトルページの木版画

Sylvestro *Ganassi.Regola Rubertina* (Edition Peters, 1977) <請求記号 J85 - 279 >

**バス・ガンバを演奏する王女アンリエット・アンヌ ジャン・マルク・ナティエ(1685  
~1766)作の肖像画**

『ニューグローブ世界音楽大事典』2巻 (講談社、1993) <請求記号 C60 - 101 >

**バス・ガンバを演奏する聖チェチリア Anton van Dick(1599-1641)作**

**バス・ガンバを演奏する聖チェチリアと天使の歌い手 Nicolas Colombel(1614-1717)  
作**

Albert P. de Mirimonde . *SAINTE-CECILE METAMORPHOSES D ' UN THEME  
MUSICAL* (EDITIONS MINKOFF, 1974) <請求記号 X - 051 / I >

「ジャック・ヴァン・アイクの家族」の部分図 ゴンザレス・コケス(1614-84)作  
ドイツの優れたヴィオラ・ダ・ガンバ奏者、ヨハン・シェンク 彼の弟ペーターに  
よる版画 (1700 年代)

Nathalie Dormetsch. *VIOLA DA GANBA* (NewYork Hirichsen Edition, 1962)

< 請求記号 C6 - 074 >

バラック・ノーマン作 バス・ヴィオラ・ダ・ガンバ (1718)

小塩樹三郎 「Sumisonian Institution」(学習研究社、1986) < 請求記号 C53 - 997 >

\*\*\*\*\*

### 書籍

ジャン・ルソー著 『ヴィオール概論』 関根敏子・神戸愉樹美共訳 (アカデミア・ミュージック、1988) < 請求記号 C47 - 674 >

Ian Woodfield. *The Early History of the Viol* (Combridge University press、1988)

< 請求記号 C45 - 174 >

Nathalie Dormetsch. *VIOLA DA GANBA* (NewYork Hirichsen Edition, 1962)

< 請求記号 C6 - 074 >

\*\*\*\*\*

### 楽譜

Marin Marais 《Pierce de viole, deuxieme livre》(Courlay, France : J.M. Fuzeau, 1994)

< 請求記号 H35 - 485 >

Lelair l'aine 《Premier livre de sonates a violon seul avec la basse continue》

(Beziers : Societe de Musicologie de Languedoc, 1985) < 請求記号 H28 - 047 >

Arcangelo Corelli 《Sonate a violino e violone o cimbalò ,opera Quinta》(Schott, 1987)

< 請求記号 H31 - 446 >

Christopher Simpson 《The division-violist: or an introduction to the Playng upon a ground》(Performers Facsimiles New York, 1659) < 請求記号 H37 - 602 >

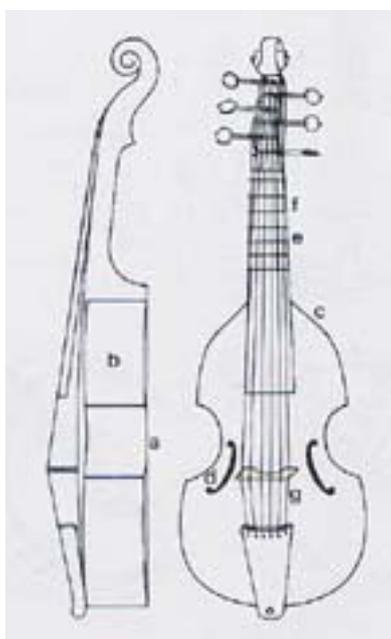
\*\*\*\*\*

### 映画資料

パスカル・キニヤール 『めぐりあう朝』 高橋啓訳 (早川書房 1992) < 請求記号 J75 - 467 >

Pascal Quignard 『Tous les matins da monde』 (Gallimard, 1991) < 請求記号 C55 - 284 >

『Tous les matins du monde』 (ピクチャー音楽産業, 1993) < 請求記号 XD20485 >



国立音楽大学音楽学部音楽学学科第19回研究発表会  
展示担当：江間祥恵・宮野あゆみ  
2003.12.3